

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】第28号 2001年3月

発行 日本口承文芸学会  
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28  
國學院大學文学部 伝承文学研究室内  
Tel. 03-5466-0224

## 第40回 研究例会報告

### シンポジウム 日本口承文芸と「近代」

第40回例会シンポジウムが、『日本口承文芸と「近代」』というテーマで行なわれた。柳田国男にはじまる日本口承文芸の研究が、従来やや等閑視してきた「近代」の問題に焦点をあてた。発表者は、真鍋昌賢、姜竣（か じゅん）、細田明宏の三氏。コメンテーターは、石井正己、重信幸彦氏にお願いした。浪花節、紙芝居、浄瑠璃に焦点をあて、都市的な大衆芸能、伝承に回収されないパフォーマンス、近代の聴衆・観客と「国民」の問題などをめぐって、活発な討論が行なわれた。発表内容と、今後の展望に関する文章を、発表者の三氏からいただいたので掲載する。なお、司会者の不弁と時間の制約から、「近代」をテーマとした意味がやや不明確だったとの指摘もあった。その点にかんする司会者の私見は、その後、小著『〈声〉の国民国家・日本』（NHKブックス、2000年11月）に述べた。（兵藤裕己）

#### 〈近代〉における口頭芸の社会的な位相

##### 一浪曲師・寿々木米若の口演記録にみる戦中と戦後一

真鍋昌賢

口頭芸の社会的な位相をさぐるためには、演者の実践のあり方を環境の変容とともに捉え直す必要があるだろう。本発表ではそうした意図に基づき、浪曲師・寿々木米若の演目選択の仕方を、口演記録（1940-1951）をもとにして明らかにすることを目標としていた。具体的には、終戦という政治史レベルの画期点が、米若の興行に与えた影響について考察した。

第二次大戦後、GHQの検閲を受けるなかで、米若は戦時色の強い演目をはじめとして、検閲コードにひっかかる演目は口演しなくなる。米若は、戦前・戦中に口演していた演目を興行にかけると、精神的に新作に取り組んだ。演目中心のジャンル分けに頼るだけでは、米若が得意とした演出の全体像をつかむことはできない。物語世界の設定（若い男女の恋仲など）、や民謡の節の挿入などは米若が得意とする演出である。それらはある一定のジャンルにのみ見いだされるのではなく、しばしばジャンルをまたいで採用されていた。米若の演出に対する理解は、興行上の必要性（2席ヨミ）に基づいて、つまり実践のレベルを重視することを通じて、見いだされるべきである。米若の口演記録を戦中・戦後にまたいで比較したとき、政治史の動向に並行した変化が認められる一方で、得意とする演出レベルでの連続性が認められるのである。

シンポジウムでは、「なぜ近代をテーマとする必要があるのか」について、もう少し議論が必要であったかもしれない。「近代」という言葉が指し示す内容について、各研究者のイメージは必ずしも一致しないだろうし、なぜその言葉を問題化する必要があるのかについても様々な見解があるだろう。私自身は、口承文芸の「現代」を位置づけるための前提作業として、「近代」を再構成する必要があるのだと思っている。そうした前提作業は、口承文芸研究者がひろく共有せねばならない課題ではないだろうか。

## 紙芝居と「近代」

姜 竣

「口承文芸」あるいは「口承文学」という語は、「藪の藎の苦味」を嗜むような「矛盾のある」概念であり（柳田国男）、その矛盾は、「声」としてのことばを書かれた「テキスト」に基づく認識で捉えるという倒錯に根ざしている（W-J. オング）。いま、そうした矛盾を強調することの学問的な意義は、調査者に史（資）料批判の徹底もしくはそれへの自覚を促すところにあり、そこで、日本の口承文芸研究が「近代」を通過して再構築できるかが問われることになる。では、紙芝居の研究においてはどうか。

筆者は紙芝居における口承性を、既存の研究の分類を参照しながら、その要素のレベルで捉えるわけでない。むしろ、紙芝居に対して諸制度の規律権力が働き、専門家や知識人による啓蒙と変形、好事家の懐古的な捏造が行われる場合、それらによって作り出される不可視な関係性の網の目をすり抜けてしまう性質こそが紙芝居における口承性である。

例えば、昭和13年の警視庁取締の骨子は、「紙芝居に使用すべき絵画に説明書正副二部を附し警視庁に提出検閲を受け」「従業中説明書を携帯し之に相違せる説明をなさざること」というものであり、そのことは、絵だけでは物語の内容が把握できず、したがって、あるいは、絵と従業時の説明との結びつきが固定しないことが問題とされたことを意味する。なぜならその製作過程には文字テキストが存在しないか、その存在が極めて不完全だからである。

こうした調査をある種の分類、分節をはかる視線と捉えるなら、それは街路の演者たちの動きにとうてい及ばない部分がある。そこで、戦後一部の府県では「業

者条例」なるものを設け、演者に身体検査と常識試験を行うに至ったのである。むしろ、紙芝居に群れる子どもたちを媒介に、最もその本質に深く接近していったのは当時の知識人たちであった。しかし、戦前戦中の教育紙芝居の運動に見られるごとく、紙芝居に対する啓蒙と変形には限界が見られる。

以上のように紙芝居における口承性は、近代の様々な関係性の網の目を明らかにしつつ、そこに収斂しない領域として捉える必要があり、そこではじめて口承性の内部構造が十全に描けるのである。

## 浄瑠璃の「古典」化

—明治時代の言説から—

細田 明宏

浄瑠璃を口承文芸として捉えるに当たっては、実際にどのように上演され享受されているかに注目することが重要だろう。

現代における上演の場に身を置けば、聴衆の中に文字テキストを目で追いながら語りを聞く人がかなりいることに気付かされる。近世期にはこのような聴衆はいなかったことを考えると、近代において浄瑠璃のオーラルなあり方が変化したことがここに示されているのではないだろうか。

このような変化をもたらした一つの要因として、浄瑠璃の社会的意味の変化があげられるだろう。そこでこの発表では、明治時代の言説で浄瑠璃がどのように扱われたのかを考察した。

簡単にいうと、西洋からの劇文学という概念の輸入により、浄瑠璃は国民文学の中に位置づけられ、近松門左衛門をはじめとする浄瑠璃作者は劇作家と捉えられたのである。そして浄瑠璃は次第に国民の「古典」として扱われ、明治30年代には浄瑠璃は保存すべきだという主張も

みられるようになる。

このような言説からは、浄瑠璃がそれまでとは異なる意味を持つようになったことがうかがわれる。ここで必要なのは、このような言説が実際の上演にどのような影響を与えたのかという分析であろう。石井先生にもご指摘いただいたように、今回の発表では具体的な事例を検討するには至らなかったが、それは今後の課題としたい。

---

## 国際シンポジウムを開催して

常光 徹

---

私の勤務する国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）では、1月31日から2月2日まで「東アジアにおける文化交流—儒教思想と民間説話—」と題して国際シンポジウムを開催した。民間説話に関する討論は初日だったが、午前中に伊藤清司氏の「民間説話の伝播と変容」の基調講演があり、午後から崔仁鶴氏「クロンドン・シンスンビ（蛇婿入り）譚に現れた儒教思想」、千野明日香氏「絵姿女房譚と中国の類話」、島村恭則氏「現代民話の日韓比較」、趙丙祥氏「幽霊のいる現代社会で生きる—中国現代の伝聞についての社会学的研究—」の研究発表が行われた。

崔氏は、朝鮮時代（500年間）の儒教思想が昔話の伝承にどのような影響を及ぼしているのかをクロンドン・シンスンビ譚に焦点を絞って具体的に指摘された。千野氏は、中国における絵姿女房の昔話の類型を広く収集・分析し日本の昔話との違い、その特徴について述べられた。島村氏は、韓国で語られる現代民話を取り上げて日本の伝承との比較をすることで、社会文化的な背景の相違や調査者のあり方などについて言及された。趙氏は、主に北京の学生たちの間でうわ

さをされている怪談や不思議話を数多く紹介し、それらが「リスク社会」としての特徴をもつ現代社会に対する一種の述懐と批判である点について発表された。

途中でマイクのトラブルが発生し参加者の皆さんにご迷惑をかけたが、司会の松原孝俊氏の巧みなリードをはじめ、コメントーターの飯倉照平氏、樋口淳氏、加藤千代氏、常光徹の協力もあって、二つのテーマつまり伝統的な昔話と現代のハナシを軸に活発な討論が交わされた。会場からの発言を求められた三原幸久氏の「近い将来〈現代のハナシ〉を中心に国際シンポジウムが開催されることが望まれる」との言葉は印象深かった。

=====  
☆理事選挙の結果以下の方々が2001~2002年度理事に決定しました。（50音順）

東北・北海道 佐々木達司／武田正

関東 川田順造／常光徹／中川裕  
兵藤裕己／米屋陽一

東京 石井正己／磯沼重治／大島建彦  
大島廣志／徳田和夫／中村とも子  
野村純一／藤井貞和

中部 石川純一郎／鈴木昭英

関西 岩瀬博／丸山顕徳／三原幸久  
依田千百子

中国・四国 加藤千代／白石昭臣

九州・沖縄 下野敏見／宮地武彦

### 計 報

本学会の創立にご尽力され、会長も務められた本田安次氏が2月19日、老衰のため逝去されました（享年94歳）。謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 事務局報告

### ●機関誌『口承文藝研究』既刊号（バックナンバー）の販売について

刊行後3年を経過（発行されている最新号から3号分遡る号まで）した機関誌『口承文藝研究』を一律500円（送料別）で販売しています。会員外の方でも可。

現在、間もなく24号が発行されますので、21号までがその対象となります。20号に『『口承文藝研究』総目次』がありますのでご参照ください。なお、1号から4号までは在庫がありません。また、残部僅少の号がありますので、お早めに。

問い合わせ、申込みは、事務局「既刊号」係までお葉書でお願いします。発送時に、送料込みで代金を請求させていただきます。

## 第25回 日本口承文藝学会 大会のご案内

2001年度の大会を、6月2日（土）、3日（日）の両日にわたって、愛知県犬山市の名古屋経済大学において、開催いたします。公開講演・シンポジウム・研究発表・会員総会・懇親会を予定しています。詳細は、後日お知らせいたします。

=====

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください。入会申込は下記にご請求ください。

入会金 1000円 年会費 4000円 送金先：【郵便振替】00180-4-44834

連絡先：〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學文学部伝承文学研究室（野村教授）内

日本口承文芸学会事務局 TEL03-5466-0224

The Society for Folk-Narrative Research of Japan c/o Prof. J. Nomura Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 150-8440 Japan

☆編集担当は大島廣志・磯沼重治・中村とも子です。